入選

貯水中

静岡県　静岡サレジオ中学校　一年
皆川　瑠花

小さな親切。私は、自分が日頃どのようなことができているか、考えてみた。バス通学で、運転手さんに、降車時「ありがとうございました。」と言っている。小さな子に優しく接している。ご近所さんに、あいさつをする。どれもとっても、普通のことだ。ボランティア活動のような大きな名目が無いと、自分が親切をしているとは思えないのが本音だ。

そこで、私がしてもらった親切を見つめ直すことにした。親切にすることとは逆の立場になるが、親切にしてもらった経験は、まだ１２年間しか生きていない私にもたくさんある。

私は今年の冬、胃腸炎で夜間救急に行った。そのとき、熱、嘔吐、頻脈の症状があり、とても辛かった。医師から処方された薬を院内で飲んだが、すぐ吐いてしまった。帰宅後も嘔吐が続き、寝つけずに苦しんでいたときに、母の携帯が鳴った。母から、さっき診てくださった医師からの電話だったことを知らされた。

「まだ吐き気や熱があるようなら、今から救急外来に行ってみて。今日は市立病院だから。どうしても、あのとき脈が速かったのが気になって、体調が落ち着いたか心配していたんです。」

その後私は、すぐに市立病院に行った。今思えば、その先生は医師として当然のことをしたのかもしれない。その日、私のほかにもたくさんの患者がいた。それでも、私の症状を気にして、勤務時間を過ぎても電話をくれた先生の気持ちが、とても嬉しかった。

この経験を思い出すたびに、私は心がいっぱいになる。器に水滴が溜まっていくような感覚に似ている。小さな１滴ずつの水だけれど、入ったときにポチャンと大きな音を立てる。まるで、私を大事に考えてくれているんだよ、と主張しているように。そして、もうこんなに器に水が溜まっているよ、と言っているように。

小さな親切は、この水滴だと思う。相手にその水滴が入らなければ、親切にはならず、親切にしたと思った人の自己満足になる。その反対も然りで、親切とは思っていなくても、相手がそう受け止めて心の中のコップに水滴が落ちたなら、それは親切になる。

迷子になって、助けてもらったこと。家の鍵を忘れて、隣のおばさんに母が帰宅するまでいっしょに過ごしてもらったこと。兄に遊びに連れて行ってもらったこと。大叔父にピアノの発表会で、大拍手してもらったこと。すべて今、私の心の器にこれらの親切の水滴がいっぱい溜まっている。

親切というものを、ボランティアのような形式にとらわれていたが、いつでもどこでも誰でもできるんだと考え直した。私も、自分が今までもらった水滴を、ほかの誰かにあげられるようになりたい。

そしてもちろん、自分にも水滴をあげて、自分を大事にすることも怠らない。

私は、たっぷり貯水中。